

\*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



—チェルノブイリに思いをよせて—

# ポレーシェ

## 動き出した 南相馬市民団体ネットワーク!

(A&S 福島 代表 高橋 慶)

皆さんこんにちは、福島県南相馬市で「A&S (アクティブ & セイフティー) 福島」という市民団体を 10 月 9 日に立ち上げ、活動を開始しました。先日、11 月 5 日には発足集会を開き、「チェルノブイリ救援・中部」の河田昌東さんに講演をお願いし、大変貴重で有意義なお話をいただきました。

また、この会の中で、ウクライナから届けられた放射線線量計 50 台を、「A&S 福島」へ贈呈していただきました。この線量計は、ウクライナの市民が日本の大変な状況を知り、日本の復興に役立てて欲しいと言う思いで、贈ってくれた線量計だと聞いています。私達は、その善意の心を一切無駄にすることなく、大切に活用します。ウクライナの方々の温かい優しさに、心から感謝します。

さて、今回少しずつ動き出した我が団体ですが、さっそく贈っていただいた線量計の無料貸し出しを始めました。まだ広報もあまりしていないのに、借りに来てくださる方があとをたたく、放射線に対する関心、不安の大きさを改めて知ることができました。その他にも、仮設住宅に支援物資を届けているある NPO の方から、「仮設住宅の人達が、自分達の住んでいる所の線量を知りたい」と聞きました。私達の出番です。「線量計をたくさん持って行って、住民の人達と一緒に全体の線量を計ってみよう。そうすれば住民の人が自分の目で線量を確かめられる。」

今まで、知らないことが不安だった、それを知ることで不安が少しでも解消されれば、こんな良いことはありません。知ることで、次に何をすべきか考え、行動することができます。これでまた一歩前進、いや半歩でもいい。前を向いて動き出す、動き出せば希望が持てる。希望が持てれば笑顔が増える。…そんな活動を、今後地道に行ってまいります。



<線量計の贈呈式(2011.11/05)>

(左から、神谷理事長、星さん、高橋さん、西野さん)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

### NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号 150)

口座 番号：普通 6949211

口座 名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便 振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org



3.11 から半年以上経ち、メディアが取り上げる被災地の話題は、ごく一部に止まっています。しかし、ここに生きる人間にとっては、現在進行形で災害が継続しているのです。この地に住む人々でさえそれを忘れてしまいそうなほど、日常へと戻り始めています。「日常」に戻ることは、決して悪いことではありません。むしろ好ましいことではあると思いますが、その裏で、今なお仮設住宅で暮らしている方々や、放射能被害に晒されているお子さんをお持ちの家庭があることを、忘れてはいけません。市民全員の「日常」が戻るまで、活動は終わりません。震災後に様々な団体が立ち上がり、既存の団体も含め独自に活動を行っています。メディアで取り沙汰されなくなって久しい今、県内外から

の支援の糸が細くなっていることは否めません。その細い支援を、各団体で取り合うようにして活動しているのが現状です。今後、長期に渡って支援活動を行っていく必要があります。

震災直後の混乱期は過ぎ、南相馬市民団体の活動内容を整理する必要性が出てきました。これまでのように、各団体がそれぞれ活動に取り組んでいたのでは、同じ活動で競合してしまうことや、活動を行う上でのマンパワーの不足、支援活動自体の停滞・混乱が発生することが考えられます。

まずは、各団体が持ち合わせている情報を共有し、市全体として抱える課題を浮き彫りにすることが重要です。「南相馬市民団体ネットワーク」というひとつの大きな組織を前提として、各団体はその「部署」に位置づけられることで、スムーズな活動運営が可能になるかと思えます。不得意な分野の支援を受けて消化不良を起こすのではなく、それを得意とする「部署」に受け渡すことで、効率よく、必要とされている活動が必要な方々に届くようになると信じています。

「南相馬市民団体ネットワーク」構想の実現に向けて、地域の潤滑油としての働きをしていく所存です。どうかこれからも、ご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。

## 「住民の横の広がり」と自主的な行動が鍵

(いわき市在住 奥村 岳志)

11月23日に、福島市渡利(わたり)地区で開かれた「渡利の子どもたちを放射能から守ろう!」と題する住民集会(主催:「渡利の子どもたちを守る会」など)に参加しました。渡利地区は、市内でも高い放射線量が計測されている地域。



多くの住民が、避難と補償を求めて政府と市に対して行動をしています。

10月8日には、政府と市が、同地区住民への説明会を開催しました。政府は、「特定避難勧奨地点には指定しない。とにかく除染をやる」という方針を示して終わろうとしましたが、集まった400人の住民は納得せず、激論が5時間

間に及び、それでも決着がつきませんでした。10月28日には、住民が東京に出向いて、政府と交渉をしました。23日の住民集会は、これらの行動を総括し、今後の方向を議論するものでした。地区の住民ら約80人が集まりました。主催者の住民から、高い放射線量に不安を持つ住民、とくに子ども・妊婦のいる家庭が、同じ市内や近隣市町村に一時的でも避難・移転できるように、国・行政に「選択的避難区域」の指定を求め、援助・補償を要求していこうと提案されました。除染によって放射性物質が舞い上がる危険があり、「除染中だけでも避難を」という声がありました。

国も行政も除染を呼号する中で、渡利地区の住民の要求が、孤立させられてしまうかのように見えていましたが、この日は、隣の大波地区、さらに郡山市、南相馬市などからも、同じ気持ちの発言がありました。避難を求める横の広がりを感じました。「大規模除染」が始まっている大波地区からは、「実際には放射線量は下がらない」「仮置き場が、住民の不在のところで決められている」などの問題が指摘されました。

南相馬市と並んで、渡利地区は、放射能問題の大きな焦点です。同じように、住民の自主的な行動が鍵をなしていると感じました。

## 南相馬たより……

(神谷 俊尚)

11月5日、「アクティブ&セフティー福島(略称 A&S 福島)」の発足集会を開催しました。

6-7月に実施した、南相馬市の汚染測定調査で協力いただいた市民の皆様と、議論を積み重ね、「できる事から始めよう」「市民の手で始めよう」がテーマとなりました。「食品測定」「生活線量調査」「地域空間線量測定」「線量計の貸出」「生活領域の除染」「勉強会・講演会」を行います。他の市民組織と共同行動も呼び掛け、「フロンティア南相馬」「福好再見」「安心安全プロジェクト」等々とコラボしています。結成集会当日、ウクライナから「日本を救おう！キャンペーン」の線量計50台と、支持者からネーム入りビブス30着が贈られました。その後、河田さんから「放射能汚染の中でどう生きるか?~チェルノブイリの教訓から~」と題した講演があり、内部被曝の怖さと注意点が具体的かつ丁寧に語られ、参加者の共感を得ました。



さっそく始めた「線量計無料レンタル」は、一週間で出払い、待ちの状態となっています。年明け1月には、食品測定の「市民測定所」を開設する予定です。

以下は、意外に知られていない現地の様子のレポートです。

- 10月から政府は、30Km圏の警戒避難準備区域を指定解除し、桜井市長は「南相馬市に帰って来てください」と、繰返し呼びかけています。南相馬市内の小中学校・高校が、再開されました（一部除外）。しかし、各学校とも生徒総数の約半数しか通学していません。71,000名だった市の人口が、現在は約42,000名となり、多くの方が県内外に避難しています。今、原町区の私立幼稚園・保育園は、開園しています（園児の数は少ない）が、市立幼稚園・保育園は、全て休園中です。
- 11/11-12の「ふくしま会議」では、子を持つ親から悲痛な叫び声が上がりました。福島県内に住み続けざるを得ない人たちは、「あなたたちは育児放棄者だ」とののしられ、また避難した人々は「あなたたちは故郷を捨てて逃げた」と言われ、分断されています。また災害には「触れたくもない、あきらめた」「現実は何も変わっていない、なにも言わないで」「これからは復興することが重要だ」等々、現状を肯定した動きも多く存在しています。
- ある医師の告白です。「戻らない看護師たちに、退職勧告をすべきだとの意見も出ています。実際、休業補償（1ヶ月給与の6~7割）を支給され、東電からの仮払金や避難に関わる精神的苦痛に対する慰謝料（避難した人…最高12万円/月、避難しなかった人…10万円/40日）を加えると、現に働く人より多い収入を得る人もいます。」（医療ガバナンス <http://medg.jp> より）  
事実、ハローワークには求人が（求職ではない）有るにも拘らず、埋まりません。  
働かないでいる辛さと、その事による社会人としての磨滅も、考えなければならぬ重要な課題です。本人もですが、次世代の人生にも大きく影響します。
- さて除染です。行政は年明けから全市内の除染を行い、「安全な環境を取り戻す」と言っています。しかし、除染に伴う「汚染物仮置場」すら未定で、除染期間は、「生活圏で平成26年3月末迄」と長期に渡り、さらに問題なのはその体制です。大手ゼネコン（南相馬市は大成建設らしい）への丸投げで、市民参画の方策は一切ありません。単純労働者として組み込まれるしかありません。そして、順番が来るまでは「個人で除染をどうぞ」という、無責任な態度です。（11/21南相馬市行政区長会議にて）

今、南相馬市を訪問して痛感するのは、住み続けている人々の多くが、当たり前前の普通の生活をして、無関心を装っていることです。しかし、公園に子どもの姿はありません。全ての人が、心のどこかに不安を抱えながら生活しています。

同市の70%が、汚染された山と田畑です。そこで何ができるのか？ どうか現実的な知恵で応援してください。ポレーシェ読者の皆さま、一人でも多く福島の実状を自分の目で見て、触れて、参加して、感じてください。考えてください。そして、福島に寄り添い続けてください。

## クリスマスカード・キャンペーン進捗報告

(まだ間に合います。締め切りは 12 月 12 日!)

初めまして(?) こんにちは。カードキャンペーン担当・研修生の柿野です。クリスマスカード・キャンペーンについてですが、前回のポレーシェに挟み込ませていただいたチラシをご覧のとおり、今年も行っていきます。しかも、今年はチェルノブイリ原発事故 25 周年ということでもあり、また福島原発事故で、原発に対する意識が高くなっているということから、例年よりも多くのカードをウクライナの子ども達に届けることができるといいなあ、と思っています。

さて、10月22日23日に行われた「ワールドコラボ2011」では、あまりよくないと言われていた会場内のブースの位置、プラス、雨天にもかかわらず、小さいお子さんから学生の方、お年寄りの方に至るまで、たくさんの方が来場され、素敵なクリスマスカード作りの様子をたくさん見ることができました。中には、「こういったこと、うまくないんだけど…」と言いつつも、協力してくださった方もいて、本当に感謝の念でいっぱいです。その方にとっては、「うまくない」のかもしれませんが、「子ども達に贈ろう」という心が、最高に「うまい」と言わせるものだと思います。皆様の温かい心は、必ずウクライナの子ども達に届きます! また、今年は南相馬の NGO 団体さんともタイアップすることができ、交流を深めることができました。ウクライナの子ども達へのクリスマスカードとともに、福島の子ども達へのニューイヤーズカードの方も、合わせてよろしくお願ひします。

現在、私のつてをたどって、大学のボランティアサークルさんをお願いをしたり、会った方に協力を呼びかけたりしてはいますが、なかなか難しいところですね…。ぐっとクリスマスの雰囲気近く12月に入れば、きっとカードを贈ろうという方が増えるはず!!

切実に願っています。皆さんの優しい心を集めています。ご協力お願いします。(Nタマ 柿野)

## 木村真三さん+河田昌東さん 講演会 11月13日 東別院ホールにて (橋本)



「放射能汚染時代を生き抜くために チェルノブイリから福島へ」というタイトルで、最初に河田さんの講演。河田さんのお話は何度も聞いていますが、すばらしいのは毎回新しい情報が加わっていることです。超多忙の中、日々進化しているのです。今回は、食物の汚染や田畑の栽培規制、福島市渡利地区の現状など、初めて聞く話でした。

さて、木村真三さんは、NHK で観たとおりの、爽やかな青年(43歳? 若い) 科学者でした。昨年6月、チェル救のコーディネイトで初めてナロジチ地区に入り、以後何度も当地を訪れています。その間に原発事故が起きました。当時は、厚労省管轄の(独法)労働安全衛生総合研究所の研究員でしたが、「勝手に汚染調査に行くな」と言われて、辞表をたたきつけたそうです。そして、放射線測定の第一人者、岡野真治さんとともに、いち早く福島の調査を始めました。これが、NHK のETV 特集「ネットワークでつくる放射能汚染」で大反響を呼んだのです。今は福島に住み込んで、汚染測定や除染や食品汚染の問題に取り組んでいるそうです。本来は移住すべきなのに、まだたくさんの方が住んでいる。年間被曝線量5mSv(目安として屋外8時間、屋内16時間)以上は避難地域指定に(年間5mSv以上はウクライナとベラルーシの強制移住区域)、妊婦や子どもは年間1mSv。2~3μSv/h程度の住宅地汚染は除染可能。ただし、町内会レベルで全体に広く行うこと。学校給食には、汚染されていない食品供給を行うこと、などの提案をされました。ユニークなのは、森林の除染。住宅地に近い森林から100m以上を伐採し、落ち葉を取り除いた後、広葉樹の植林を行う。伐採後の木は、樹皮と枝は汚染物質として処理し、幹は震災復興の建築材料に。海洋汚染調査のプロジェクトも立ち上げるそうです。また、今後もナロジチで、内部被曝や食品の汚染度、罹患率の調査を行い、データ化するそうです。会場から出された質問に対して、お二人の波長が良く合い、とてもスムーズに的確な答えをいただきました。



福島原発震災から8ヶ月が過ぎた。政府の発表とは裏腹に、事態は一向に改善しない。今でも毎時20トンの冷却水を炉心に注入している。冷温停止は何時になるのか、未だに明らかでない。見えない炉心の状況を想像しながらの対策が続いている。そうした中、前号でも指摘したとおり、政府は「放射能汚染の全国化」を着々と進めており、放射能の拡散は始まっている。今後、我々は放射能との長い戦いに突入するだろう。こうした事態をもたらしただけでなく、国や電力会社の責任を厳しく追及しながら、それでも未来に向けて諦めてはならない。

### ●セシウム入りのセメントで作られた保育園

最近、東京都目黒区のある母親から、相談のメールが入った。古くなった保育園から引越しのために立てた新園舎が、汚泥焼却灰由来の「放射性セシウム入りのセメント」で作られたことが判明し、業者もそれを認めたという。どうしたら良いのか、という相談である。通常、コンクリートの建物の中は、空間線量率が屋外と比べると低い。自然放射線が、コンクリートで遮蔽されるからである。ところが、この園舎は建物の内部が屋外の2倍もある、という。勿論、絶対値は毎時0.11マイクロシーベルトと低い。明らかに福島原発由来の放射性セシウムが原因である。こうした汚染は、今後日本中で起こるだろう。政府が、「被災地を助けよう」という掛け声で、汚染した瓦礫などを全国の自治体に受け入れるよう要請しているからである。東京都は、全国に先駆けて東北の瓦礫を引き受けた。瓦礫の表面だけを測るサーベイメーターで測定し、「問題ない」としている。このような測定方法では、Kg 当り 1000Bq 以下の汚染は検出できない。瓦礫を焼却すれば、その10倍以上の放射能を含む焼却灰が出る。それは産廃処分場に運ぶか、セメント原料にされるのである。これまで大量の電気を使ってきた東京都民は、その責任を認めて汚染を受け入れるべきなのだろうか。

### ● 福島の現実

一方、米どころ福島は今危機に瀕している。福島産米の殆どの放射性セシウム濃度は、Kg 当り数十ベクレル以下である。ところが、二本松市や福島市大波地区でとれた米から、暫定基準値 500Bq を超え、11月25日には最大Kg 当り 1270Bq のセシウムが検出されたのである。汚染の原因は、8月に二本松市での予備検査で500Bqが出たときに推定できたはず

であるが、政府は何ら対策を取らなかった。大きな原因は地形である。両者に共通するのは、汚染した山からの水である。汚染した山の落ち葉が分解し、アンモニウムイオンが発生すれば、セシウムは水溶性になる。これはチェルノブイリでも指摘されていたことである。国は、チェルノブイリに何ら学ぶことなく、口先だけは除染を唱えながら農家を救えなかった。「日本は科学技術で優れている」という思い上がりの結果である。枯葉の季節を迎え、水道水の汚染も懸念される。チェルノブイリ救援・中部は、南相馬市の市民と協力して、A&S 福島（アクティブ・アンド・セイフティ福島）を設立し、「食品放射能測定室」を開設した。農家が作る作物や、市民が持ち寄る食べ物を自分達で測定し、安全安心を確かめるためである。長く続く活動のために、全国の皆さまの支援をお願いしたい。

### ● それでも未来に種をまく

福島前と福島後の日本は変わった。今後様々な形の汚染が全国化し、被曝による病気は増えるだろう。これは脅しではない。チェルノブイリの経験からの冷厳な事実である。にもかかわらず、私たちはこの環境下で生きていかなければならない。汚染食品を食べながら、その影響を軽減し、被曝を最低限に抑える方策を考えなければならない。これもまた、チェルノブイリの経験が役に立つだろう。私たちはチェルノブイリを教訓にし、同じ轍を踏まないように歩まなければならない。汚染された大地で農地を守りながら、如何に汚染しない作物を作るか、必死の福島の農家の人々を支えよう。

暫定基準を一刻も早く改定し、消費者の安全を守ろう。未来の世代にこれ以上の禍根を残さないために、私たちがやるべきことはたくさんある。  
(河田)

# 特集Ⅰ ラスキ村バイオガス、放射能除去装置取り付け完了！ (原 富

男)

9月21日から10月28日まで、ウクライナナロジチ地区ラスキ村のバイオガス関連工事をしてきました。

今回の工事は、① 火災にあったバイオガス管理棟(貨車)の修復 ② バイオガス排出槽の圧力調節 ③ バイオガスのカベツキー農場牛舎への配管敷設 ④ 放射能除去装置の取り付けの4点でした。

今回は、工事個所が狭く、多人数ではかえって工事がやりにくいこともあって、私と通訳兼作業員の竹内さんの二人だけで工事を行いました。



## 1、火災にあったバイオガス管理棟(貨車)の修復

事前に内装工事を依頼し、天井・壁面・床などを無垢の板張りとししました。これは、これまで壁・天井がプラスチックの薄板張りで、燃え易かったことの反省からです。火に直接関係する部分の床・壁は、煉瓦で防火壁・床を作り、万全な状態としました。現場に到着した時には、貨車の外に焼けた保温材のアスベストや板材・建具などが散乱していましたが、これらは分別して燃やし、残りは農場の人に片付けてもらいました。ガス配管関係では、貨車内のガスメーター・配管・脱硫装置・加温装置など、全てが使えない状態で、これらを新しく直しました。しかし、脱硫装置だけはウクライナに適当な材料がなく、日本で製作し送ることにしました。

## 2、バイオガス排出槽の圧力調節

仕切り壁の位置に誤りがあり、加圧が強すぎたため、仕切り壁をずらし、低くすることで直しました。これは、ハンマードリルで従来の壁を壊し、レンガ壁を新規に作り直しました。また排出槽の出口のバルブ位置を下げ、液肥の取り出しを容易にしました。

## 3、バイオガスのカベツキー農場牛舎への配管敷設

これまでの経験で、ガスが夏場に設計以上に出たことから、これを実験目的だけでなく、牛舎での給湯利用に使ってもらうための工事です。実験だけでは世話の大変なバイオガス装置ですが、実際に牛舎でお湯を使えるようになれば、世話の「しがい」があるというものです。牛舎は、バイオガス装置から200m離れていますが、牛舎から放射能除去装置への水道管の敷設も必要となったため、ガス管と水道管を同時に敷設することにしました。(右上の写真参照)



## 4、放射能除去装置の取り付け

水道管の敷設は、当初予定にはなかったのですが、除去装置を効率よく動かすには、装置手前の希釈槽で、原液の3~4倍に希釈しなければなりません。水量は320ℓ必要となるため、近くの井戸からバケツで運ぶのも大変です。大きなタンクへの汲み置きも冬場の凍結などの問題があり、結局、大変でしたが200m離れた牛舎から配管敷設することにしました。また除去装置は、高さ30cm×幅30cm×長さ110cmのプラスチック製ですが、ウクライナにはこの用途に合うプラスチック箱がないと判断し、日本から持ち込みました。この大きさそのままでは飛行機に乗せてもらえないため、半分のサイズの箱を2個用

意し、それを連結して使用しました。除去装置は、バイオガス廃液をゆっくり流さなくてはならないので、内部に12枚の堰き止め板を取り付けてあります。この中に1cm大のゼオライトを詰め込み、放射能を吸着することになります。

今回の工事では、以前の工事に比べ、部材の買い出しなどは、どの店に何が売っているかがこれまでの経験で分っていたため、それほど困りませんでした。土木・煉瓦・ブロックなどの工事は、狭い場所でもあり、収穫時期で現地側の人を頼めない事情もあり、二人でやらざるを得ませんでした。

煉瓦・ブロックなどは到着後が大変で、二人で手おろしするので、仕舞いには関節が壊れそうな思いがしました。重労働にも関わらず、本来は通訳の竹内さんが頑張ってくれて、ようやくできた工事でした。また、10月と言えば、日本感覚ではまだ工事できる期間なのですが、ウクライナでは既に冬に入っており、氷点下の日や雪が降った日もありました。私の住む長野県と比べても一ヶ月以上早い冬の訪れで、泊まっていた家ではペチカを焚いていました。このような寒さの中でのレンガ積みやブロック積みなど、モルタルやコンクリート仕事は凍結が大敵ですから、随分心配しましたが、ぎりぎりセーフとなり、偶然ですが恵まれていたという事でしょう。

生活面では、住んでいる家には水道がなく、通りにある井戸ポンプ型の水道から、バケツで水を汲んできて使うのですが、一日おきに断水し、断水後は錆水が出るという繰り返しで困りました。また、ラスキの住宅にはシャワーも風呂もないので、水を入れたバケツをガスコンロに乗せてお湯を作り、体を拭くことしかできませんでした。便所も使えない状態でしたので、現場近くの木陰が便所となり、覗きに来た(?)牛に「あっちにいけ!」と言いながら用を足しました。

今回の工事には、私自身は初めてパソコンを持っていきましたが、携帯電話を経由する方法でのメールは、非常に役立ちました。派遣期間が長くなると、留守宅の様子や日本からの仕事の依頼などが心配になりますが、メールが繋がるとお互いに状況がよく判り助かります。チェル救への連絡や現場の様子なども、毎日写真付きで送受信できました。

しかし、今回滞在中に全ての工事を終えることはできませんでした。除去装置は冬場にも利用しなければなりませんので、装置を保護する小屋が必要になるからです。分厚いブロックで作ることになったのですが、小屋の1/3しか完成せず、残りは現地の職人にやってもらうこととなりました。



<希釈槽(完成)と  
装置を保護する小屋(未完成)>

## アクシデント

ようやく「これで日本に帰れる」と安心したキエフでの帰国便が3時間も遅れてしまい、ヘルシンキでの乗り継ぎに間に合わず、予定外の一泊。翌日の便は、ソウル経由名古屋着というアクシデントも発生しました。英語も、フィンランド語も、ウクライナ語も、ましてや韓国語もできない私としては、とんでもない2日間でした。

「菜の花プロジェクト」も5年目を迎えた今、放射能の除去装置が設計通り稼働し、ウクライナとそして福島の大震災現場で活躍するようになることを、夢んでいます。



<初雪(貨車の前で)>

### 南相馬市での放射線量測定ボランティア活動に参加して

責任者である政府も東電も、

誰一人として責任を取っていない

(第4次参加 龍頭 喜久雄)

10月末の第4次測定検査に、スタッフ2人と一般参加者5人で参加してきた。昼過ぎに「東北道」で福島県に入り、車内で測定器を渡されて使用法の説明がなされた。テレビなどでよく聞く「チチチ」や「ピーピー」という音を耳にすると、いよいよやって来たという感じである。

郡山付近の車内は0.5マイクロシーベルト/時(年間4ミリシーベルト・以下単位は略)を指し、県道に入って飯舘村では1.5であった(ちなみに私の地元豊田市は、0.11程度だから10倍以上高い)。南相馬市中心部の市役所付近は0.2を示し、町中ではマスクをしている人を見かけず、買い物客や道行く人たちなど、皆さんは普段どおりの生活を送っているようにみえた。

ところで、測定の初日は原町区の北西方面の山際で、県道を進むと飯舘村へと続く。最初の測定地は山際近くのアスファルトの農道で、地上1m地点は1.78で、1cmでは3.38であった。2日目は、原町区の中心部28ヶ所を計測したが、1m地点は0.27~0.87で、1cmでは0.45~1.35であった。やはり、地上近くの線量が高くなっている。この日、別のグループの人から最高の線量は13であったと聞いた。それは、警戒区域近くの山際地点である。

地元の新聞「福島民友」には、県内各地の幼稚園や学校など公共施設での放射線量や、野菜・果物のセシウム検査結果などが、毎日掲載されている。(10月27日の測定では、川俣町の山木屋小の1m地点は、2.94という異常な高さである。) また、南相馬市の小・中学生を内部被曝検査したところ、274人からセシウムが検出されたという。子ども達が体の変調や異常を訴えたとき、政府や県・東電はどのように対応するのか。どう責任を取るのだろうか。原発事故から8ヶ月経っても、責任者である政府も東電も、誰一人として責任を取っていない。「恥知らず」なこの国は、外国人の目にどう映るのであろうか。目を離さずしっかりと見守りたい。

何も変わっていないのに、どうして「避難解除」なのか

(第4次参加 山田 哲司)



〈第Ⅰ期測定地点が記された地図を元に、第Ⅱ期測定が行われた。同じ地点を測定することに意味がある。〉

7月の第3次測定活動にも参加したので、2回目の参加でした。第3次では、南相馬市北部の鹿島区の測定を行いました。今回はそこよりも原発に近い原町区で測定作業を行いました。一日目は北部を、二日目はより原発に近い南部を、そして放射線量が高いといわれている山側部の測定を行いました。測定作業そのものは、2回目ということもあり、特に問題はありませんでした。

第3次との違いは、市民の方と触れ合う機会が少なかったことです。測定した地区が先回の場所とは異なるので、比較は難しいのですが、三ヶ月経過しても放射線量が下がっているとは感じませんでした。山側部では、まだまだ放射線量は高く、二日

目には10μシーベルト/日、を被曝しました。

測定作業をともにした地元の方から、たくさんのお話をいただきました。ある方は、「仕事のお得意様が原発20キロ圏内に多くあり、原発事故以後に、お得意様が遠隔地に避難せざるを得なくなったため、仕事が減ってしまった」といっておられました。また、宮城県に子どもを含めて家族で避難している方からは、政府の「避難解除」についての怒りを聞きました。除染作業が何も進んでお



〈測定地点について説明〉

らず、以前と何も変わっていないのに、どうして「避難解除」なのか、帰ることはできない、という怒りでした。また、「原発事故が起きるまでは原発で働いていた」方の、お話が聞けました。原発作業員を運ぶ車の運転手をしていた方、原発の警備業務をしていた方です。事故後、以前の仕事を辞め、測定活動に協力しておられました。「原発事故を契機にいろいろ考えた」といっておられました。字数の関係でこれ以上のことはかけませんが、得ることが多い第4次測定活動でした。これからも「チェル救」の活動に協力したいと思っています。

### 「ヒカリモ」の生育地が、津波で3ヶ所失われました

(第4次参加 南相馬市在住 伊賀和子)

10月28日、29日の2日、NPO法人 チェルノブイリ救援・中部さんの「第2期 南相馬市空間放射線量測定」に参加した。集合場所は、チェル救さんのご指導を受け10月9日に結成準備会が発足したばかりの「A&S 福島」事務所前。集合時間の9時数分前に着くと、第1回目の測定時に出会ったなつかしい顔もチラホラ。「おはよう」の代わりに、つい「お久しぶりで〜す」の挨拶になってしまった。割り当てられた担当地区は、まあまあ地理の分かっている所だった。これなら第1回目の時と同じように、午後の早い段階で終われるだろう。第1回目は午後の測定ポイントを2ヶ所残すのみだったので、余裕の昼食をとったのだった。今回の相棒は、豊田市から参加くださったRさん。私が車の運転と数値の記録を担当し、Rさんが測定することに決めた。それでは、レッツゴー。さて、測定地付近に着いてポイントを定めようとしたら、それがなかなかむずかしい。



【カーで紹介したいヒカリモ：4ミクロンほどの藻類で、南相馬市には5ヶ所の生育地がありましたが、今回の津波被害で3ヶ所が失われました。】

測定ポイントごとに拡大して渡された地図があまりに大きすぎ、測定ポイントへの道がどこからつながっている道なのか見当がつかないのである。この問題には最後まで悩まれた。2日目は私の庭のような自宅付近が担当だったが、事務所に戻ったのは、前日と同じく午後4時過ぎだった。後で知ったことだが、今回は測定ポイントが前回にくらべて10か所ほど多かったそうだ。終了時間の遅れには、もう1つ原因があったのだ。つるべ落としの陽を気かけながらの測定であったが、2日目は私の自宅に立ち寄り、昼食をとったり、「ヒカリモ」というちょっと珍しい藻類の生育地をRさんにご案内することもできた。チェル救さん、Rさん、そして第1回目の相棒Hさん、南相馬市のために遠くから応援に来ていただきありがとうございました。

### 避難できたら幸運なのだろうか、避難を望んでいるのだろうか (第4次参加 尾形 慶子)



〈津波で線路とともに他の車両が流された。取り残されたディーゼル車〉

#### ●放射線マップを作るために

10月27日から3泊4日、南相馬市の生活放射線測定隊に参加した。私は、比較的線量の高い山沿いを測定した。地元の人が車を運転して、所定の地点を探してくれる。おかげでスムーズに測定がはかどった。今回の測定では、海側は0.2~0.3  $\mu\text{SV}/\text{h}$ 。前回に比べて、線量は若干下がっているようだが、山沿いを中心に2  $\mu\text{SV}/\text{h}$  以上と、依然として高い線量の箇所もあった。

#### ●本当に避難を望んでいるのか

私が1日目に一緒に回った人は、小5の子どものいる父親で、0.5  $\mu\text{SV}/\text{h}$  ほどの所に住んでおり、避難していない。線量は高いが、避難勧奨されるほどではないからだ。良くないとは分かっているが、仕事は辞められないし、家族と離ればなれになってまで避難したくない。しかし、20万円の義援金が出たとき、9万円のカ

イガーカウンターを真っ先に買ったという。

別の男性は、30km ラインより外に避難している。家の線量は  $0.8\mu\text{SV/h}$  ほど。 $2.0\mu\text{SV/h}$  を超えるスポットもあったという。彼は家族そろって避難でき、補償もされる。私は、彼の家の近所を測定した。田圃に囲まれた場所で、若い家族が住むにふさわしいモダンな家が数軒集まっている。避難せず残っている家もある。たまたま高いスポットがなかったからだ。高い線量が出て、避難できたら幸運なのだろうか。避難を望んでいるのだろうか。分からなくなった。

●やっぱり子ども達の住むところじゃない

3泊4日の滞在を終えた帰り道、私は具合が悪くなってきた。風邪をひいたようだった。でも、いつもの風邪じゃない。南相馬はほかほか暖かだったし、夜も良く眠れていた。普通なら、風邪をひく理由がない。証明はできないけど、免疫機能が落ちたんだと思う。私は福島で3日と持たなかった。やっぱり子ども達が住むべき環境じゃない。ラッキーかどうかという問題じゃない。あの子たちは、みんなアンラッキーなのだ。改めて原発に対する怒りが湧いた。

### 千葉県に住む孫達の祖父として

(第5次参加 岐阜県坂祝町 小寺 忠)



<20 \*。圏内立入禁止ゲートの奥にある家は、強制避難(空家)、手前の家には人が住んでいる。>

福島原発の事故による、放射能被害の報道を見聞していて、自分が放射線や放射能汚染について無知なため、よく理解ができなくて、無闇に不安と怖れを感じておりました。小学校5年生を筆頭に、今年の3月28日生まれの乳児まで、孫達5人が千葉県に住んでいますが、その祖父として、彼らへの影響がどうなのか知りたいと考えておりました。8月28日、地元の文芸サークル「ききりん」主催の河田昌東先生の講演会で、このプロジェクトを知りました。

6月に、岩手県大槌町にて生活支援ボランティアをさせていただき、津波被害の恐ろしさを実感しました。南相馬は、原発事故による放射線被曝に遭い、地震・津波に加え三重の被災となり、その状況がいかなるものか知りたくて、参加させていた

できました。

このプロジェクトを企画していただけた、「チェルノブイリ救援・中部」の皆さまが、すでにチェルノブイリ事故直後から放射線被害の実体の調査研究を実行され、被災者の救援活動を実行されてきたとの履歴を聞き、敬服するばかりです。

調査の方法は、地元の区長さんや民生委員の方々に、あらかじめ指定された計測地点に案内していただき、地上1cmと1mの大気放射線量観測を行いました。海岸地区より山側が、舗装道路上より草地上がより線量が高いことを確認できました。今後、各地で政府発表の放射線安全基準を拠り所にして、除染などの汚染防除作業が行われると思います。私が暮らしている岐阜県は、隣県の福井県敦賀市周辺の原発の影響を受ける地域です。地元行政に、平時の大気放射線量データの測定や、学校給食材料の放射線量データの蓄積をしていただけるよう、働きかけていこうと考えております。内部被ばくによる放射線被害が表面化するの、5年後10年後と聞きました。放射線被害の不気味さはそこにある。もっと学習して放射線を理解したいと考えました。



<今もなお、放置されたままの船>



<一地点につき、地表1cmと1mの空間放射線量を測定する。>



〈2日目、見事な順路で測定地点へ案内をしてくださった高田さん(右)と佐伯さん〉

あの日から、いつも胸に重しが乗っている気分でした。あまりに鮮明・克明に、メディアを通じて目の当たりにする地震と津波の被害、そして放射能という、見えない・感じないが故に、ひたひたと背中に感じる悪寒…間接的だけでなく直接的に何かできる事はないのか。ずっとそう思っていた私に届いた「放射能測定プロジェクト」のご案内でした。募集条件に謳ってあった「50歳以上で今後子どもをつくる可能性のない人」、正に心が震えました。現地の今も続く状況に、実感としての身震いがしました。

11月5日(土)緊張と興奮とともに、チェル救理事長である神谷さんの運転される車に乗り込み、南相馬市に向かいました。自己紹介の後、車中にて放射能測定器の操作練習と、実際に高速道路走行中の窓から測定をしてみました。須賀川0.2マイクロシーベルト、郡山0.5、二本松0.6。高速降りて飯館村0.8、郵便局の苔の上では最高8.2! 目的地の南相馬市役所付近で0.3、そして原発20km圏内立ち入り禁止ゲート付近も0.3。ゲート前で写真撮影しましたが、監視の警官のひと言「観光ですか?」そう聞かれても仕方ない。でも…と複雑な思いでした。

宿となる「松の湯旅館」に到着後、当夜のイベント「A&S 福島」発足集会と「河田昌東氏の記念講演会」に参加。明日はいよいよ測定作業です。

鹿島区福祉サービスセンターにて打合せし、私とパートナーの山盛さんは、浮田地区の区長である木村清一さんの案内の下、500mメッシュのポイント28箇所の測量を始めました。区長2年目の木村さんは、地区の隅から隅まで熟知されており、小雨の中、作業は順調にはかどりました。住民の方の「ご苦労様です」の言葉に思わず「とんでもない!」、日々大変な環境の中での生活に、こちらの方が頭が下がりました。春に見事だったであろう桜の落ち葉。3マイクロシーベルトという高い線量でした。この日の夜は、「A&S 福島」のメンバーの方たちとの交流会と夕食。今でこそやっと話せるようになったという、当日や直後の話は当然の事ながら、名古屋では感じる事のできない想像を絶する内容であり、帰ってしっかり伝えなければと思いました。

作業2日目は雨も上がり、澄んだ空気(でも本当は違う)の中、神野さんとのペア作業は、40年近く郵便局職員をされていた高田祐計さんの案内。9年前に退職されたとはいえ、見事な順路での作業は予定より2時間も早く終了し、感服。海から6キロ離れた高田さん宅にも、床下まで津波が押し寄せ、視界を遮る集落がなくなってしまった今、「波頭が見える」と、淡々とした口調で教えてくれました。

最終日、国道6号線北上。まだまだ残る沿岸の被災状況。夢中で写真に納めましたが、今も頭の中に焼きついて離れない「堤防の上に置かれた少女の片方の長靴とおもちゃ」、どうしても撮れなかった光景でした。夏に参加した広河隆一氏講演のタイトルは、『チェルノブイリ25年、福島元年』。「がんばろう」とか「応援してます」って私は言えません。離れた名古屋にいても、ずっと同じ思いでいたい。寄り添ってほしい。思うことしかできなくてもずっと念じてほしい…今回のプロジェクトに参加して、より一層思いを強くしました。

帰りの車中でのサプライズ---なんと、第4次参加者名簿の中に、娘の恩師の名前があったのです。繋がる思いを感じました。



〈測定地点は、いつも道路上とは限らない。時には山中へも立ち入る場合がある。〉

11月6日と7日、南相馬市北部に位置する鹿島区の計52地点を、測定器を片手に地元のボランティアの方と回りました。測定活動をしながら、南相馬は自然が豊かな土地であることを実感しました。東は太平洋に面しており、鹿島区を流れる真野川では、ちょうど鮭の遡上を見ることができました。西部の高地では紅葉が始まり、山菜など山の幸にも恵まれています。家々の庭には、たわわに実った柿の木が目につきました。しかし、もちろん食べることはできません。

鹿島区はほぼ30キロ圏外で、原発により近い小高区や原町区に比べれば、線量が低いところが多いのですが、全域が汚染されていることに変わりはありません。南相馬市立総合病院の検査によると、事故から半年たった時点で、市内の小中学生の半数から、低線量ながらもセシウム137が検出されています。

測定2日目の移動中に、幼子と手をつないで歩く妊婦を見かけました。「彼女たちには、どんな将来が待ち構えているのだろうか?」と、つい考えてしまいます。ベラルーシやウクライナの療養施設で会った子ども達(幼い頃、チェルノブイリの事故で被曝した)の顔を思い出しました。いずれにしても、放射能の影におびえながら一生を送らなければならないことだけは確かです。

活動の期間中、「A&S 福島」の発足集会や地元の方との交流会に参加しました。「自分たちのことは自分たちでやるんだ!」と立ち上がった若者たちや、将来的な展望は描けないけれど「向いている方向は同じだから」と、南相馬の地で結婚を決意された女性など、厳しい現実のなかにあっても、しっかり前を向いて生きていこうとする人々がいました。そうした人たちへの支援が少しでもできればと、4日間の日程を終えて思いました。

## 南相馬市鹿島区「千倉仮設住宅集会所」で「クリスマスカード作り」をしました。



11月6日(日)南相馬市鹿島区の千倉仮設住宅の集会所で、ウクライナへ贈るクリスマスカードを作るイベントを開きました。小さな子どもからお母さん、そしておばあちゃんまで参加してくださいました。

この千倉仮設住宅に住んでいる皆さんは、震災によって初めてご近所さんになった皆さん達だという事です。お隣同士でも、顔見知りでも、まだまだ「近しいお付き合い」という間柄になれず、どこか距離感があるような…。「短い時間だけど、和やかな時間が

過ごせますように」と、心の中で祈っていました。

チェル救が毎年準備している、台紙や折り紙・シールなどを使って、工夫一杯の個性的なカード作りは、真剣なまなざし。時間が経つにつれ、おしゃべりにも花が咲きましたが、私にとって高齢の方のお話は、通訳が必要…スミマセン。

そして素晴らしいカードができあがりました。皆さんから「楽しかった」と喜んでいただき、はるばる南相馬まで出かけた甲斐があった!と思いました。

最後にみんなで記念撮影。

楽しんでいただけましたか?(神野 美知江)



<千倉仮設住宅にお住まいの皆さんと(2011.11/6)>

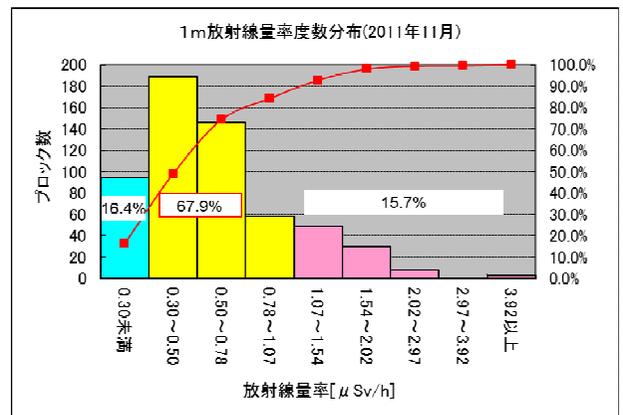
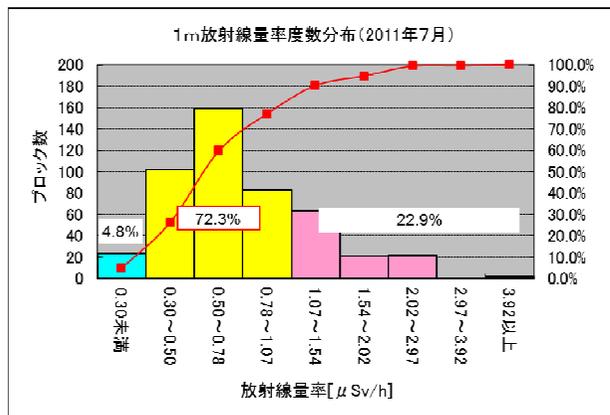
## 第Ⅱ期「南相馬市放射線量率マップ」測定結果(速報)

(池田 光司)

今回の第Ⅱ期の測定は、10月28・29日に原町区、11月6・7日に鹿島区と、2回に分けて行われました。7月の第Ⅰ期の測定から、4ヵ月を経た測定となりました。原町区ではA&S福島、鹿島区では社協鹿島センターと鹿島ボランティア会と共同して取り組み、測定はとても順調に進みました。地元の方が車を出して、そこに名古屋から参加したメンバーが加わり、2人1組で手分けして測定するという形が定着してきました。地元の方々と一体となつてのマップ作りは、市民主体の復興と支援を考える上で、望ましい形のひとつになると思います。

測定方法については前回と同様で、前回作成したマップの500m四方のブロック割をそのまま利用して、各ブロックの中心付近の道路上を1ヶ所選び、地表から1cmと1mの高さで放射線量率[マイクロシーベルト/時間]を測定しました。前回測定できなかったブロックも極力測るように努めたことで、測定ブロック数は478から579に増えました。

測定の結果、放射線量率(1m計測値)が前回に比べ、平均して23%減少していることが分かりました。下のグラフは、ブロックごとに計測された放射線量率の分布を示しています。左側の前回7月のグラフに比べ、右側の今回11月のグラフが、全体的に線量率の低い側にシフトしていることが分かります。データを詳しく見ると、半数近くのブロックが前回計測した値より30%以上減少していることが分かりました。一方、前回計測した値より逆に増加したブロックも1割程度あることが分かりました。山側が高く海側が低いという傾向は、前回と変わりありませんでした。



放射性セシウムの物理的な半減期から計算すると4ヶ月で5%程度の減少となりますが、23%という、それよりも大幅に減少したことになります。放射性物質の土壌表面から内部への沈降、雨による洗い流し、除染などが理由として考えられますが、現段階でどの効果が大きかったかを特定することはできません。しかし、今回の結果を基にしてさらなる詳細な調査・分析を行えば、放射能が減少した理由を明らかにしていくことも可能と考えられます。そして、その結果は、放射能汚染に対する今後の取り組みを考える上で、多くの指針を与えてくれるものになると思います。

今回、このように貴重な結果を得ることができました。この場をお借りして、あらためて測定にご協力いただいたみなさまに感謝申し上げます。

市民自らの手で放射能を測定して、「放射能がどのように変化していくのか」を明らかにすることはとても大切なことと考えています。今後、冬から春にかけて強い風が吹くとき、放射能に汚染された土ぼこりの影響がどのように出てくるかも心配です。当面は、定期的な測定(年2回程度)を継続していく予定ですので、引き続きご理解とご協力をよろしくお願い致します。

なお、今回の結果を反映したマップは、12月中旬に完成する予定です。ご希望の方は事務局までお問い合わせください。

## 竹内さんのウクライナ便り

先号で書きました前首相ティモシェンコ氏の裁判の結果、彼女が禁錮7年の実刑判決を受け、さらに他の横領容疑でも捜査が行われており、欧米で批判されていることは日本でも報道された通りです。この件が原因で、EUとウクライナの間で締結されようとしている連合協定の文面にも、将来のウクライナのEUへの加盟に関する言及を含まないという可能性が出てきた由。一方、11月に入りロシアからウクライナの輸入するガスの価格について、ウ・露間の交渉が行われ、一部メディアでは大幅な値下げ（今年第3四半期で千立米あたり354ドルのところ、同230ドルに？）で合意が成立したと書かれていますが、ウクライナ政府は未だ正式のコメントを控えています。この値下げにより、ウクライナの国営ガス会社ナフトガス社の赤字が削減され、それに伴って、現在停止されているIMFの対ウクライナ融資が再開される可能性も指摘されていますが、引き換えにウクライナは、ナフトガス社の民営化に際し、ロシア企業に特惠条件を与えるのではとの推測もあります。

チェルノブイリ被災者の社会保障削減については、その後も激しい抗議行動が続き、政府は法改正を見合わせていますが、ウクライナ東部のドネツクでは11月15日、事故処理作業員らが、法に定められた金額での年金支払いとアザロフ首相との面談を要求、年金基金州支部前で無期限ハンガーストライキに入り、23日現在41名がハンストを続行中。他州の事故処理作業員もハンストに加わっています。

ドネツク市議会は、彼らに対するテロ行為の危険性があるとして、この抗議行動を禁止する訴訟を起こしましたが、事故処理作業員たちは、テント村が撤去される場合にはいかなる手段も辞さないとしており、集団焼身自殺の可能性にまで言及。その後ドネツク市長は強制撤去は行わないと発言したそうです。法律では、各カテゴリーのチェルノブイリ被災者の老齢年金額につき、一定の補填を行うことが定められているのですが、国は予算不足を理由にその支払いを行っていないケースが多く、最近でもキエフ市内の被災者が、法に基づく支払いを求めて年金基金事務所で交渉中に心筋梗塞を起こし、亡くなったという話を聞きました。

ところで、私事ですが最近結婚いたしました。妻はウクライナ人で会社の秘書をしており、彼女が仕

事から帰ってくると一緒に食材の買い出しをし、夕食を一緒に作って、食べながらTV番組や映画を観たりする



〈竹内さんとオーリャさん

(2011.10/08 原さん撮影)〉

のですが、週一度の番組で、二家族（夫婦と子どもの核家族がほとんど）の妻たちが一週間だけ入れ替わって過ごすというものがありました。事前に行き先の家庭については何も知らされないという条件があり、相手側の家に着いてから、妻の残した指示書（家族の構成・家計、どの時間帯をどう過ごすかなど）を見て、何日かはその代わりを務め、その後は自分流に新しいルールを導入することも可、という筋書です。それぞれの家庭の夫は、未知の女性（とTVクルー）を自宅に受け入れるにあたって、当然最善を尽くしていると思われ、画面に見られる生活の様子が実際の日常とすべて同じかどうかは割り引いて考えるべきでしょう。しかし、毎回いろいろな事情の家庭が登場し、車椅子の障害者の夫、イタリア人の夫、ダウン症の子ども、薬物依存症を乗り越えた夫妻などの暮らしが描かれ、二家族の住む場所が遠く離れた地方だったり（ウクライナ東部のハリキウと西部のリヴィウなど）、都会に住む家族と辺鄙な農村の家族だったりして、生活様式と文化の相違を乗り越える女性らの努力が、時に真剣に、時にユーモラスに描かれています。視聴者に対してけっこう啓蒙的な効果もあるのではないかと思います……といえば大袈裟かもしれませんが、入れ替わるのかなぜ妻であって夫でないのかについては、フェミニズムの見地から批判もあるはずですが、けっこう人気番組なのか、それなりに長く続いています。

まあ、日本でこういう番組を作るのは、難しいでしょうね。ウクライナだと、初めての客を自宅に招く時、まずアパートや家の部屋すべてを案内することもよくあり（もちろん、事前に入念な掃除が行われていると思われ、もともと「家」の開かれ方が違うような気がします。ウクライナでも独りが好き、あるいはよその人をうちに入れたくないという性格の人はいるわけで、安易な一般化は避けなければなりません。 (11月24日)

NPO法人 チェルノブイリ救援・中部 2011年度 上半期 収支報告書

(2011.4/1~2011.9/30)

収入の部			支出の部		
項 目	金額(円)		項 目	金額(円)	
寄付金収入	11,453,677		事業費	12,647,688	
粉ミルク支援事業	83,000		粉ミルク支援事業	387,276	
被災者支援事業	82,000		医療機関支援事業	850,000	
加ゾチ再生菜の花プロジェクト	225,000		被災者団体等支援事業	550,000	
福島原発事故被災支援事業	2,900,364		加ゾチ再生菜の花プロジェクト	3,231,884	
一般	8,163,313		文通・クリスマスカード事業	260	
会費収入	344,000		福島原発事故被災支援事業	6,537,449	
正会員	34,000		通信販売事業	395,570	
賛助会員	310,000		イベント関連事業	95,249	
助成金収入	11,364,210		業務委託事業	600,000	
三井物産環境基金	4,500,000		管理費	2,036,988	
三井物産環境基金(東日本大震災復興助成)	6,664,210		給料手当	1,080,896	
高木仁三郎市民科学基金	200,000		通信費	81,890	
事業収入	196,200		荷造運搬費	52,025	
福島原発被災支援事業	196,200		旅費交通費	71,212	
雑収入	336,448		会議費	7,083	
物品販売	14,790		消耗品費	192,601	
その他	321,658		印刷製本費	21,534	
受取利息	1,426		修繕費	68,260	
			地代家賃(4月~10月)	350,000	
			租税公課	700	
			諸会費	55,000	
			支払手数料	51,787	
			雑費	4,000	
			当期支出合計	14,684,676	
当期収入合計	23,695,961		当期収支差額	9,011,285	
前期繰越収支差額	9,669,266		次期繰越収支差額	18,680,551	
収入総額	33,365,227		支出総額	33,365,227	

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

平成 23年 10月 26日 監査人 神野 美知江

今年度上半期は、福島支援のご寄付が、たいへん多く集まりました。皆様の温かいご支援に感謝申し上げます。なお、福島支援金約290万円のなかに、ウクライナで集められた「日本を救おうキャンペーン」の寄付金、約147万円が含まれています。福島支援事業費は、測定器の購入や汚染マップ作成、測定隊などの費用です。新規会員も少しずつ増え、ポレーシェ読者も約930名となりました。ありがとうございます。

会計ソフトを新しくして初の中間報告、そして新しく始まった福島支援で色々と心配もありましたが、無事に監査を終えることができました。また、今年からNPOの会計基準が改正され、収支報告書の形式が変わります。年度末決算に向けて、明朗な会計報告ができるようしっかり勉強したいと思います。(兼松)

## 事務局便り

晩秋の美しい紅葉の季節である…と書き、それなのに、と思う。紅葉、そして落葉。放射性物質で高度に汚染されたその落ち葉が、ますます、脅威となる。南相馬測定に行き、それを実感した。桜の紅葉の民家の門前で、ガイガーカウンターは高いレベルを示した。美しい光景が、もはや「美しい」といえないこの不条理。否、原発そのものが、実は不条理の最たるものであった。しかし、人々はそこで暮らしている。

3月東電福島第一原発事故以降、事務局で鳴った電話の数、取材、河田さんをはじめとして、チェルノブイリの理事が日本全国で行った数多の講演会。人々は、放射能に汚染されてしまった事を否応もなく受け止めざるを得ない。しかし、本当の事を知り、あきらめるのではなく、なんとしてもこの状況下を生き延び、「未来にも口をつけたい」のだ。子ども達を守りたいのだ。もうすぐ今年が終わる。

—合掌。—そして、そして、希望への祈り。

(山盛)



### —新刊のご紹介—

放射能汚染下で  
どう生きればいいのか  
チェルノブイリ救援を通じて考える  
**「チェルノブイリと福島」 河田昌東:著**  
緑風出版:定価 1600 円

20年間にわたるチェルノブイリ被災者救援から知りえた、放射能被曝の実態、そして学んだこと…。本書はチェルノブイリ事故と福島原発災害を比較検討し、福島原発事故が引き起こしつつある土壤汚染や農作物、飼料、魚介類、水などの放射能による汚染、そして外部・内部被曝による人間への影響を考えます。

私達の暮らしのなかで放射能汚染が現実となった今、いかに被曝を減らすか、その対策と知恵が盛り込まれています。

## 編集後記

☆ワールドコラボフェスタで福島産の梨の販売をした。1個 350円～500円という、自分では買ったこともない高級梨。にもかかわらず完売！なまものゆえ売れ残ってはいけなさと真剣勝負でした。(佳)

☆健康診断を受けた。冷静な女性の検査技師は、氷の笑顔で丁寧に手順を語りながら、視線すら合わせず、着々と検査を進めていく。横顔しか見えないこの空虚な時間、ああ～患者にはなりたくない。(美)

☆TPP(環太平洋パートナーシップ協定)は、1994年～2008年まで毎年続いた、あの「年次改革要望書(米国からの命令書)」の亡霊である。「すべての物品とサービスを貿易自由化交渉のテーブルに載せる」という事は、日本の一次・二次・三次産業、すべてが米国の意のままになるという事である。「平成の開国だ！」と声高に叫ぶ政治家がいる。冗談じゃない。これは「平成の不平等条約」なのだ。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473